

I. 不登校における支援とは何か

子どもの意思を大事にしながら一緒に考えるしなやかな態度は、意外に難しい。大人のとらわれている価値観は、子どもには透けて見える。大人にとって、疑わず信じてきた価値の見直しが迫られている。

親も大抵、当初は自分のつらさに目を奪われている。そういう段階を経て、最もつらいのは子ども自身であるということにふと気づいたときに、初めて子どもに寄り添うことができる。

教師や保護者がそれぞれの立場から、子ども観や学校観の転換、いわば目から鱗が落ちる経験をしたことが共有されるならば、なかなかうまく運ばないと教師・保護者双方から言われる相互の接点が結ばれるのではないだろうか。連携ということが様々な領域で強調されているが、不登校については、子どもへの対処を分担する連携などよりも、子どもと関わる者どうしがそれぞれ見出すいとおしきの共感が、子どもを支える安全なクッションとなる。

子どもは、そういう大人たちの気付きを待っているのではないか。

不登校生徒は、学校には行かなければならないという思いと行けない自分の現実との間で苦しんでいる。そういう彼らの思いを汲んでみると学校と教育の未来像は、子どもに寄り添い、より自由な自分になる子どもを見守る教育の実現と学校環境づくりということになるだろう。

一人一人を大切にしてほしいという願いを人一倍もっている不登校の子どもたちの思いは、特別支援教育が個々の子どもたちにこだわり、自己実現を目指してきたことと重なり合う。そして、誰もが自由に学べる環境づくりは、これもまた特別支援教育が合理的な環境調整を目指していることと符合する。不登校への支援と特別支援教育との突き合わせは有効であろうと考えられる。

II. 人はすべてリソースをもっている

リソース (resource) とは「資源」という意味である。リソースを活用することを通して、クライアントが解決へと近づいていく。リソースには、クライアント自身もっている内的なリソースと、クライアントの周囲にある外的なリソースの二つがある。良い面や良い点・得意なこと・好きなこと・秀でた能力のように役に立つような個人の資質は、明らかに (内的) リソースである。あるいは、助けてくれる友人や家族・所有しているツールや物品のように助けになる人や物事は、明らかに (外的) リソースということになる。しかし、それだけではなく、問題や症状と関連している事柄、あるいは問題や症状そのものであっても、クライアントにとって有効に活用することができるのであれば、それはリソースとなる。そうになると、リソースを「活用できる」ということが大切になってくる。

クライアントは、問題や悩みを抱えている存在だが、同時に、リソースをたくさんもっている (リソースフルな) 存在なのである。解決志向アプローチにはクライアントのもっているリソースを信頼する姿勢が根本になければならない。

例外探しから解決の始まりを見つける

「音楽のある日は登校している」、「図工の時間だけは、教室に行く」など、うまくいっていることもある。実は、「例外」が解決の始まりになっている、そこにこそリソースがあるというのが、解決志向のブリーフセラピーの考え方なのである。「いつもかな?」「ずっとそうなのかな?」「誰とでもそうなのかな?」などと聞くと、意外にできていることが多いことに気付く。次に、「それはどうやったの?」「何が良かったの?」とうまくいった理由を聞き、追及をすることで、さらにリソースが増える。

また、教師自身のリソースも知っておき、自分のリソースをどう活かすかで、未来は大きく変わる。「あるもの」を手掛かりに考えることで、教師自身も「これならできそう」と思えてくる。

「世界最高の学級経営 the FIRST DAYS OF SCHOOL —How to be an effective teacher 成果を上げる教師になるために」で紹介されていたが、始業式を待たずに新担任が全生徒に手紙を出したり、家庭訪問に出かけたりすることで、子どもたちに「安心」を提供することができる。今まではタブーとされてきたが、日本でも今では多くの学校で、同様の取組が増えている。例えば、前年度の欠席日数等で不登校が心配される子どもであれば、入学式前日に来てもらい、入学式の練習をしておく。始業式も同様である。このシミュレーションで、校長、教頭、学年の先生と知り合いになれるという良さもある。

子どもが、「この先生となら1年間うまくやっていけそう」と思えるような出会いには、一つ目は「笑顔」、二つ目は話しかけるときに決めつけたような(威圧的な)言い方にならないように気を付けること、三つ目は身長の高い子どもと話すときの目線の高さである。

たった一つでもリソースを見つけることができれば、そのリソースがどうして生まれてきたかを聞いていくことで、次のリソースを見つけることができる。

Ⅲ. 休み始めの対応が肝要

1. 高知市の欠席対応スタンダード

- ① 「不登校かもしれない」という意識でかかわる
 - ・ 欠席理由に敏感に！！
 - ・ 理由は具体的に問う
- ② 学校として責任をもつ体制づくり
 - ・ 教師による対応のばらつきを認めない
- ③ 対応の基本パターン



- 初日から3日間の対応で、「食い止められる」か「長期になる」かが分かれる
- ・ 欠席1日：電話（初日の対応は特に大切）or 家庭訪問
- ・ 欠席2日：電話 or 家庭訪問
- ・ 欠席3日：必ず家庭訪問（指導でなく支援することを忘れずに）チーム支援の始動

2. まずは欠席連絡を手がかりに

欠席理由を聴いて「わかりました。担任に伝えておきます。お大事になさってください。」だけの対応になっている学校が多い。保護者のトーンや電話口から漏れてくる泣き声など、感じ取れるものはたくさんある。

① 欠席理由があいまいなときの対応

具体的に症状や発熱などの症状を言わずにただ「具合が悪い」とか「おなかが痛い」などの理由の場合は、症状や病名を具体的に尋ねる。

保護者：「今日は、具合が悪いと言っているので、学校を休ませます」

学校：「どんな症状ですか？熱はどのくらいありますか？」

保護者：「実は…熱はないのですが…、『学校へ行きたくない』と言っているのです…」

学校：「そうなのですか。どんな様子か、少しお話を聴かせていただけますか」（親の都合の良い時間に再度こちらから電話をかけるか、家庭訪問をさせてもらいたい旨を伝える）



② はっきりと「学校へ行きたくない」と言っているときの対応

より迅速な対応が必要となる。電話ではまず保護者の気持ちをしっかりと受け止め、共感し、こちらの姿勢を伝える。

③ その日のうちに家庭訪問を…目的は信頼関係を深めること

欠席の理由に不登校が疑われる場合は、前述したように、保護者の都合の良い時間に再度電話をして、子どもの状態を確認し、できれば放課後に家庭訪問する約束をする。

- ・ 不登校の原因を問い詰めない。



- ・「明日は必ず登校するように」などと促さない。
- ・「休み癖がつくよ」とか「勉強が遅れるよ」などと欠席したことを責めたり脅したりしない。

子どもの気持ちをわかろうとする家庭訪問を行う。子どもたち自身は「不登校の理由はわからない」という場合が多い。中には、いじめの場合もあるので、慎重に対応する。子どもの話を否定せずに聴き、気持ちを受け止める。「怠けている」とか「わがまま」などという受け止め方をすると、子どもは教師の心を見抜く。

3. 保護者の気持ちをどう受け止めるか

保護者は、不安な気持ちを担任にぶつけることもある。保護者の不安な気持ちを受け止めるために必要な力は「痛みへの想像力」である。経験はなくても、想像はできる。想像するとは言い換えると「わかろうとする」ことである。例えば、「お母さんも戸惑われたと思います。これからのことを考えると不安ですよ。学校としてもできるだけの支援をしていきたいと思っていますので、一緒に考えていきましょう」というような誠意が伝わる対応を心掛ける。

4. 長期化しないための学校の対応

不登校は、初日から3日間の対応で「登校できるようになるか」「長期化するか」に分かれてしまうと言っても過言ではない。我々が「子どもの欠席に敏感になる」ことが大切なのである。

① 不登校の原因についての情報を集める

もし「いじめが原因である」と疑われる場合は、迅速な対応が必要である。調査法（アンケート）と面接法の両方で、すぐに調査を行う。また、子どもが「学校が疲れる」という訴えをしているときには、教師の「禁止」「命令」「押し付け」「～ねばならない」が多くなっていないか点検する。家庭環境に原因があるのではないかと感じるがあっても、学校側からそのことについて指摘するのはマイナスにしかならない。その場合は、外部機関を勧めるようにする。

② 本人が登校しやすい状況をつくる

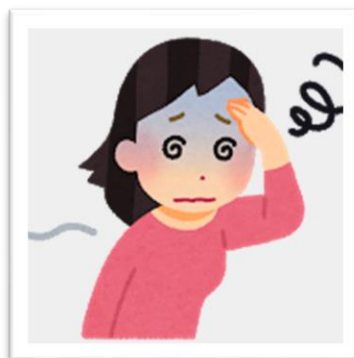
注意しなければならないのは、1時間の約束で登校しているのに、「せっかく来たのだから、もう1時間頑張ってみない？」などと、教師側の勝手な要求を提案しないことである。「約束は守る」、これが信頼関係を深めるための絶対条件である。

- ・保護者に送迎をしてもらう
- ・保護者同伴（時には弟や妹なども）での登校
- ・別室登校（保健室や相談室など）
- ・時間的な融通（遅刻・早退を責めない）
- ・特定の教科のみ参加する（本人が得意な教科の授業だけ受ける）



IV. 子どものこころは、からだとつながっていることを知る

子どもの不登校には、様々な原因が関係している。家庭の問題、学校の問題、そして身体疾患及び精神疾患などである。身体疾患としては、起立性調節障害、過敏性腸症候群、慢性機能性頭痛、貧血、甲状腺疾患などが挙げられる。精神疾患としては、統合失調症の初期症状、抑うつや不安症、強迫症などが挙げられる。教師は、次ページのリストを参考に子どものからだところの状態に気付くことから始める。



2週間続けば要注意！子どもの「からだところ」の気付きリスト

	からだの不調	こころの不調
子ども自身からの訴え	<ul style="list-style-type: none"> ・眠れない ・食欲がない ・朝がつらい、夕方から楽になる ・疲れやすい ・からだがだるい ・頭が痛い、お腹が痛い ・肩がこる ・めまいがする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆううつな気分だ ・イライラする ・落ち着かない ・集中ができない ・頭が働かない、決断ができない ・やる気が出ない、何事もおっくうだ ・何に対しても興味をもてない ・好きなことに対しても楽しめない

	表情面	言葉面
教師など周りから見た子どもの様子	<ul style="list-style-type: none"> ・笑わない ・うつむき加減 ・泣きそうな顔 ・表情が乏しい ・哀しげな表情 	<ul style="list-style-type: none"> ・面倒くさい ・面白くない ・どうでもいい ・放っておいて ・つまらない
	行動面	
	<ul style="list-style-type: none"> ・だらしない、かまわなくなる ・ニオイがする ・髪を染めたり派手になる ・汚れが目立つ ・口数が減る、行動が遅い ・忘れ物が増える ・学校のことや友達の話をしる ・落ち着きがなくそわそわしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝、学校へ行きたがらない ・遅刻が増える ・学校行事の参加を嫌がる ・電話やメールにビクっとする ・家のお金を持ち出す ・手首をかくす ・食欲低下、体重減少 ・過食、体重増加

V. アメリカインディアンの教え

どの子どもも、必要とされ、大事にされ、存在意義や存在価値が感じられる環境づくりが大切である。

- ◇ 心が寛大な人の中で育った子はがまん強くなります
- ◇ はげましを受けて育った子は自信を持ちます
- ◇ ほめられる中で育った子はいつも感謝することを知ります
- ◇ 公明正大な中で育った子は正義心を持ちます
- ◇ 思いやりのある中で育った子は信仰心を持ちます
- ◇ 人に認めてもらえる中で育った子は自分を大事にします
- ◇ 仲間の愛の中で育った子は世界に愛をみつけます

〈参考文献〉

2018年9月号 東洋館出版社 特別支援研究 「不登校における支援とは何か」 埼玉大学教育学部教授 馬場久志

2019年4月号、5月号 ほんの森出版 月間教育相談 「子どもと出会う前のリソース探し」、「休み始めの対応が肝要」 公立中学校長 吉本恭子

2019年5月号 学事出版 月間生徒指導 「不登校、その裏に潜むもの」 高知大学大学院総合人間学研究科教授 岡田倫代

2000年 ニッポン放送プロジェクト「アメリカ・インディアンの教え」 加藤諱三

